

実践英語教育授業評価

評価と今後の課題

英語教育分科会座長、大学教育センター教授

行方 均

はじめに

本学の1・2年次実践英語教育は独自の教育方針を採用している。

1年生は年度初めにクラス編成テストを受け、その結果に基づいてA・B・Cクラスに分けられ、日本人教員とNSE教員による授業を受ける。

日本人教員による1年次クラスは、英語教育分科会が選定した統一テキストを使用して読解力養成を中心とする授業を行い、学期末に統一テストを行っている。2年クラスは授業内容がReading, Media, Comprehensiveに分かれており、各教員がそれぞれのカテゴリーに応じたテキストで教授し、試験を行っている。

つぎに、NSE教員による授業であるが、NSE教員による授業はベルリッツに委託している。けれどもベルリッツに本学の実践英語教育を「丸投げ」しているということではない。英語教育分科会は授業内容、テキストなどに関してベルリッツと連携を図り、ベルリッツも本学の英語教育方針に則り、実践的な英語授業を行うことを旨としている。NSEによる授業も学期末に統一テストを行っている。このように、本学の実践英語教育はすべての学生に公平に、しかし能力に応じて、適切な学習機会を与えるという理念のもとに行われている。

今回の報告は、学生と教員両方を対象に行った1年生実践英語Ⅰa（過去3年分前期アンケート）と2年生実践英語Ⅱb（過去2年分後期アンケート）に関する評価である。アンケート結果を個別に見ていきながら、本学の今後の実践英語教育の課題を探っていくことにする。

授業評価について

① 本学の実践英語教育の目的・目標は次のとおりである。日本人教員による授業は先述のように読解力養成を中心とする授業であるが、それだけではなく、取り上げられるテーマやトピックをもとに、柔軟な思考力、正確な分析力、自由な連想力、的確な文章構成力、豊富な語彙力を身につけることを目指している。

NSE教員による授業は、使用言語は英語のみの授業で、クラスでロール・プレイ、ディベート、短いプレゼンテーションなどを行うことにより、実生活で十分使える、また応用できる実践的な英語力を身につけることを目標としている。

② 個別質問事項の選定の意図・手続き

1年生も2年生もテキストの「難易度」に関する質問項目が設けられている。これは学生、教員のアンケート結果を参考にしながら、次年度により良いテキストを選ぶ目安にするための事項である。

1年生の「学習貢献」は日本人教員による英語授業が学生にとって今後の英語学習に資するものであるかどうか、教員が学生の今後の英語学習に資するように授業を行ったかどうかを訊ね、今後の日本人教員による英語教育の改善に役立てるためのものである。

2年生の「NSE」は日本人教員による授業内容がNSEの授業でも役に立っているかどうかを訊ねるものである。

③ 共通の質問項目（問1～8）の評価結果及びその経年変化に関する所見

問1「態度」：「私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ」（学生）1年生は2007年（3.36）、2008年（3.41）、2009年（3.43）であり、ほぼ横這いである。2年生は2007年（3.56）、2008年（3.68）で、若干の伸びが見られる。

「学生はこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいた」（教員）1年生は2009年が3.82と過去3年の中では最も高くなっており、学生の授業態度の向上を示している。2年生も2007年の3.67に比べ2008年は3.86と少し伸びている。

問2「意識」：「授業の目的を意識しながら学習することができた」（学生）1年生は2007年（3.24）、2008年（3.29）、2009年（3.26）2年生は2007年（3.61）、2008年（3.71）。「授業の目的を意識しながら学習することを促した」（教員）1年生4.09～4.11、2年生は4.1～4.12となっており、1,2年生とも教員が思っているほど学生が意識的に学習していないことを窺わせている。

問3「説明」：「教員の説明は分かりやすかった」（学

生) 1年生は2007年(3.31)、2008年(3.59)、2009年(3.58)、2年生は2007年(3.85)、2008年(3.91)である。

「わかりやすく説明した」(教員) 1年生は2007年(4.06)、2008年(3.92)、2009年(4.36)。2年生は2007年(4.06)、2008年(4.07)である。

1年生に関しては、学生と教員の比率の開きが大きい。したがって、教員は1年生に対するより丁寧な説明が求められる。

問4「対応」：「教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた」(学生) 1年生は2007年(3.53)、2008年(3.79)、2009年(3.68)。2年生は2007年(3.9)、2008年(3.95)である。

「学生の質問・意見に対して適切に対応した」(教員) 1年生は2007年(4.11)、2008年(3.96)、2009年(4.42)。2年生は2007年(4.03)、2008年(4.12)である。

ほかの事項に比べて全体的な比率は高いが、1年生の2007年と2009年に学生と教員の比率の差が大きい。教員の側の対応の改善が求められる。

問5「時間」：これは1週間の学習時間を問う事項である。1・2年生ともに少なくとも1時間程度の学習を課した教員に対し、学生の学習時間が短すぎるのが気にかかる。これはテキストの難易度とも関連性があるが、学生は総じて実践英語の学習にあまり時間をかけていないことが表れている。

問6「成績」：「成績評価について十分な説明があった」(学生)、「十分な説明をした」(教員)

英語教育分科会は毎年専任教員、非常勤教員を一堂に会して、ガイドライン説明会を行い、第1回目の授業で成績評価方法について学生に十分な説明をするよう要請し、シラバスにもその旨を載せ、周知徹底を図っている。だが、比率を見ると1・2年生ともに学生の比率が低いので、さらに周知徹底を図る必要がある。

問7：「成果」 「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた」(学生)、「獲得させることができた」(教員)

1・2年生ともに、学生の比率が教員に比べてやや低いとはいえ、それなりの成果をあげてきていると言える。

問8：「満足」 「私はこの授業を受講して満足した」

(学生)、「学生は満足したと思う」(教員)

1年生は学生が2007年(3.19)、2008年(3.09)、2009年(3.3)、教員は年度順に3.42、3.41、3.69となっており、とりわけ2009年の学生と教員の比率に多少の差があるのが気にかかる。2年生は学生が2007年(3.78)、2008年(3.86)、教員は2007年、2008年とも3.6となっており、学生の比率が初めて教員の比率を上回っている。全体に教員の比率に比べて学生の比率が低い中で注目に値する。これは3つの分野に分かれた2年生の英語教育を学生が評価していることの証左の一つといえる。

④ 個別質問項目の評価結果とその経年変化に関する所見

「難易度」：英語教育分科会が毎年適切な統一テキストを選定している。1・2年次とも、比率を見ると、2007年と2008年は学生、教員ともに「やや難しい」と「ちょうどよい」の間に収まっているが、1年生の2009年度は「やや易しい」のほうに傾いている。これはテキスト選定の難しさが如実に表れた比率である。英語教育分科会は適当に教科書を選定しているわけではなく、学生の統一テスト成績やテキストに対する学生や教員の意見やアンケート結果を参考にして次年度のテキストを選定しているが、A、B、Cクラス共通の、ベストとは言わないまでもベターなテキストを選んでゆく必要がある。

「学習貢献」：これは1年生の質問項目である。学生の見解(約3.1)と教員の見解(約4.25)との間には大きな開きがあるが、学生の比率を上げる努力が必要であろう。

「NSE」は2年生の質問事項である。これも学生の比率が低いので、教員の側の工夫が求められるかもしれない。

今後の課題

1年生(前期3年間)と2年生(後期2年間)のアンケート調査結果を検証してきた。その結果、1・2年生の実践英語はそれなりの成果をあげてはいると言えるが、高水準で学生と教員の比率が同一レベルになるような努力を今後していかなければならないだろう。それには教員のさらなる努力のみならず、教員の努力に応えるような学生の真摯な学習態度も望まれる。